

価値転換と環境問題

高 橋 莞 爾

1. はじめに

21世紀の今、日本をはじめ世界は、厳しい決断を迫られる「歴史の岐路」に立っている。近代化に伴うひずみの代表的な環境問題を解決せねばならぬ歴史的転換期である。環境問題や格差の増大に目をつぶって成長を追う中国が国内総生産（GDP）で日本を抜く。中国が近代化を達成しつつある。「近代化」とは先進国へのキャッチアップの過程であり、「脱近代化」とは、キャッチアップ後に、グローバル化により全世界に拡大した問題にいかに取り組み、未来を切り開いていくかの過程である。この問題解決には「価値の転換」を計らねばならない。それは近代化を推し進めた西洋の科学技術の価値観ではなく、世界各国のアイデンティティ、文化の多様性をお互いに認め合う価値観、つまり、東洋的寛容の価値観でなければならないからである。いま日本は、自らの誇れる歴史、日本的思惟方法、懐深い寛容の価値観を再認識しなければならない。環境問題の先進国として謙虚な気持ちで自国を見つめ、厳しい決断をする勇気が必要であることを肝に銘じなければならない。さらにはその成果を世界に向かって積極的に発信することである。このような大変革の時は「価値の転換」をも要求するものであり、「脱近代化」の担い手として日本の果たすべき役割が何であり、いかに期待されており、それに日本の価値

観はいかに相応しいものであるかを考察する。

2. 価値と価値転換

人類は今、過去のどんな哲学者・思想家も経験したことのない難局に直面している。

大変革の時とは、問題の解決のために日頃後ろに控えている哲学者・思想家が登場する唯一の場面である。それは「価値転換」を要請している歴史上の分水嶺を意味している。

哲学については、「哲学的に考えるというのは、一時代の常識、例えばニュートン力学のような近代の定説さえも疑って見ることだと解されている。哲学としての一般的理解としては当たっている。だが、どうして哲学にはそうしたことができるのか。おそらく常識とか定説といったものが何十年、あるいはせいぜい何百年単位の期間に形成され通用してきたものであるのに対して、哲学は千年、二千年といった途方もない時間幅（スパン）で物ごとを見たり考えたりするからではなかろうか。その意味では哲学は、現実に対して幾何学という補助線の役割を果たしていることになりそうだ。それ自体にはあまり現実性はないが、それが引かれることによって現実のこれまで見えていた構造が薄れ、隠れていた構造が表立ってくるからだ。」（哲学者 木田元）が理解しやすい。

「価値転換」ということは、言うは易く、行う

はいかに困難であるか。

どのような時代にも、多くの人々に受け入れられた価値があり、人々が共に生きていく社会で通用する価値観や価値意識がある。そのように認められた範囲のなかで与えられた判断基準に従って考え、行動していれば、生活は保障されるから、その既存の価値はその時代のその社会に生きる人々の安全の条件である。それを逸脱するものは異端とされ、淘汰・抹殺される。

価値とは、学問や芸術が基礎を置く、「真・善・美」であると定義できる。しかし、それらの内容は、時代と社会によって多様であり、古今東西を通じて、絶対普遍的価値はつかみにくい。だか、価値は時と所により、相対的安定性を保っており、その特定の社会、人間の集団が激しく変化をせまられた時、それを崩壊から守ることができる。そうした保全的規範的機能を果たすことができれば、価値は有効な働きをしたことになる。

価値のなかで、人間の実生活に直接に関係するのは、道徳的価値、すなわち善である。

国家の目的は、国民が善く生きること、つまり公共の福祉にある。この目的を実現することは容易ではなく、むしろ、逆に作用することがある。民意を確認しているわけでもないのに国民のためといい、それぞれのエゴを正当化しようとするところがある。それは、民主的徳徳がかえって社会や国家の、さらには、人類社会の真の発展を害し、方向を誤らせる危険がある。

特定の社会に定まった道徳的価値、善の基準が強化されすぎると、一般に弾力性を失い、形骸化し始める傾向がある。そうすると、変化する社会環境に適応できなくなる。その変化が激しければ激しいほど、形骸化した価値は人間をますます強

く拘束することになる。

本能に従って行動すれば安全である動物と異なり、不安定で常に破滅への危険にさらされている人間の保全と、より良き生活を保障するはずのものがその本来の機能を失うことになる。「転換期」においては、固定した価値が逆に社会の没落を助長する作用をしかねない。そうした転換期の危機を乗り越えてゆくためには、価値の転換を図らなければならない。既成の価値観にこだわっているのは命取りになる。

生物の遺伝現象は、生物の保守的要素である。子は親に似た形質を受け継ぐ。反対に突然変異は、生物の革新的要素であり、突然変異個体は親に似ない形質をもって生まれる。その変異個体は、ほとんど劣性であり、環境が安定している場合には自然淘汰され、子孫を残すことはできない。しかし、環境は絶えず変化しており、特にその変化が激しいときには、変異個体の方が変化する環境により良く適応し、正常個体は死滅する。生物進化の過程で、現在まで生存し続けてきた種には事実上、自然突然変異が種を保存してきたと考えられる。生命圏にはうまく調整されたエコシステムが存在すると考えられる。遺伝や突然変異は、自然淘汰・適者生存のシステムのなかで意味をなしている。この考えは価値転換の問題に適用することができそうである。

近代及び現代の科学技術は、物質的繁栄をもたらし、人間社会は未曾有の変革を経験した。しかし、今日の日本をはじめ世界の近代化について、その行き過ぎが問題であり、近代化そのものの病状が表面化している。近代社会が順調に発展し続けていた間は、近代化は無条件に善であったし、それに前提された政治的、経済的、社会的価値、

更に道徳的価値も肯定的に評価され、是認された。近代の諸々の価値は保守的要素として近代の発展に寄与し、その安全を保障した。また、人は、近代のなかに定着した価値は正常なものであり、これを脅かすものは異端として排除したのである。しかし、徐々に安定した既成秩序に亀裂が現れ始めてその基礎はぐらついている。

3. 問題の解決方法

いまの日本が抱えている問題としては、第一に、高齢化と人口減少がある。百歳以上の高齢者が1963年に153人であったものが、今や4万人を超えた。2055年には65歳以上の人口は約40%を占め、全人口は約9千万人に減少するという(国立社会保障・人口問題研究所)。反対に、世界の人口は増加し続け、2050年ごろには90億人を超えると予想されている。中国、インドなどのアジアの人口も経済力も確実に伸びている中で日本の未来は真っ暗である。問題視されてから久しいにもかかわらず有効な手を打ってこなかった少子化対策が超短期視点の現金支給の手当ぐらゐの愚策では思いやられる。せめて、中長期的な保育所や幼稚園の確保により、社会に進出する女性が子供を産みやすく、育てやすい社会環境をつくり、企業を含め、社会全体が子供を護るという観点からの施策が急がれる。

第二は、900兆円にもなろうかという国の大借金の問題である。始まった1965年以来一度も残高は減少していない、GDPの2倍の規模に達するのは目前である。この借金を返す当てがない。しわ寄せを次世代に先送りせずに、過去の世界恐慌などに対応した偉大な政治家の英断の歴史に学

び、国と社会が崩壊することを避けなければならない。

第三は、日本の将来に対する長期的投資を拡大すること。それは教育と技術への投資である。日本は経済協力開発機構(OECD)加盟国の中で、高等教育への財政支出のGDP比率が0.5%と最低。研究開発費に占める政府の負担割合は日本17.4%、米国が27.7%、中国が24.7%であると、識者は日本の危険信号として指摘する。(丹羽宇一郎)

これらは、制度、方法、施策の次元ではなく、全体的かつ本質的な価値の転換を要請するものである。これらの価値の転換の要請に対し、日本は歴史を学ぶことにより、実現の可能性をもつものと確信する。

4. 環境問題

さて、本題であるが、21世紀の世界への貢献として、日本が世界に発信できる起死回生の提案は「環境問題」についてである。日本人のもつ価値観が「環境問題」を解決へと導くことができる。日本の歴史文化は無宗教国とさえいわれる多神教的思想の国民によって、その価値観が築きあげられた。しかし、たとえば、高度成長と環境問題については、価値転換の緊急性を唱えながら、基本的論点となると必要悪だからやむを得ないではないかなどとトーンが下がり、先送りされているのが現状である。

近代の価値観は、宇宙を無限とする世界観を前提にした。地球資源も無尽蔵と考えられ、人口は無限に増加可能とみなされていた。人間の進化と人類の存続は、全地球の安定したエコシステムが

維持される限りにおいて可能なのである。たとえば、人間はかつて天然には存在しなかったような多種類の化学物質を生産した。これが人間を含む生物の今後の世代の遺伝的形質にどんな影響を及ぼすかは本当のところ分かっていない。その他の環境問題もすべて、人間行動のこの種のものとして、制御、修正、方向転換されるべきものであるにもかかわらず、国内、国際とも足並みはそろっていない。

環境問題について、榊原英資氏が言うように、21 世紀はまさに環境の時代であり、本気になって環境を守らなくては、地球上の人間を含めた生きとし生けるものは、そう遠くなく滅びてしまうだろう。本物の環境運動とは、人間の自然回帰であり、多神教的思想の回復を伴わなければならない。本当の環境主義は、最終的には多神教によってしか実現できないのではないだろうか。生きとし生けるもの、動物も植物も人間と同じレベルでとらえ、自然と一体となって生きることによってしか、自然破壊を止め、環境を守ることはできないだろう。一神教的環境運動には限界があり、バランスを失する可能性が高い。多神教的考え方に変わらなければ、本当の意味での環境保護はできない。

まさに同感であり、世界の環境問題に関する価値の転換をリードするに相応しいのは他の存在を容認する日本人の思惟方法なのである。

「一神教は、農耕牧畜文明から発し、世界の開発のための宗教であった。人間には涙を流したが、森の植物や動物のために涙を流しはしなかった。一神教は自然の神を殺してしまった。その自然の神に無数の植物や動物が保護されていた。」(梅原猛)

自然は今や人為も含みつつ流転しつつある。昔から、日本人は自然を「手入れ」しながら、それと上手に付き合ってきたが、手入れし過ぎると「人工」になって一気に面白みがなくなってしまう。自然は本来、微妙なバランスの上に成り立っている。自然はやさしい側面と厳しい側面を併せ持つ。

自然のなかで人間だけが特別なもの、神から祝福を受けたものとする宗教、人間中心のキリスト教的ヒューマニズムに基づく環境主義は本物ではない。神の名のもとに、人間のために自然を破壊し、環境を汚染してきた。一神教的環境主義者は、しばしば過激的である。南極海で日本の調査捕鯨団の母船「日新丸」が、米環境保護団体「シー・シェパード」の抗議船ボブ・パーカー号の妨害を受けた事件はその典型である。人間に近い、人間のためになる自然を少しでも破壊することは、殺人に近い行為だとする。人間に近いと考える鯨を保護し、他方で人間の敵として鯨を乱獲することは、海の生態系はバランスを失うものとなる。

多神教は、「豊かな自然の中で、自然に親しみ、自然を畏敬する中から育ってきた。日本人の伝統的自然観は、存在するものすべてを生命のあるもの、生きとし生けるものと見、この生命あるものを規範として山川から人間までの一切の存在するものを見る。それは人間と動物の間に線を引き、人間のみを大切にしようとする西洋のヒューマニズムとは根本的に異なる。」(安田喜憲)

また、武田邦彦、池田清彦、東谷暁、三者の「環境運動は正しいか」の話は面白い。いわく、「環境問題の根元はヨーロッパ優性学くらいから出ている。劣った民族をとにかくなんかの関係で根絶やしにしないと、将来白人は危ないから。この考えは歴史もあるし、物凄く強固です」「温暖化し

て大変と思っている国民の比率は、日本は92%ダントツ。アメリカは40%代」「北極の水が解けても、アルキメデス原理があって海水面には関係ない。南極はNASAの測定で温暖化していない。氷は変わっていない。将来温暖化すると南極の水は増える」「IPCCのことをちゃんと報道している国は、実はあまり温暖化に関心がない。なぜかと言うとIPCCはそれほど危ないと言っていないからです」「ツバルは沈んでいると言うが水はどこから来るのか。満潮時にはツバルの珊瑚パレットは完全に沈む」「CO₂が増えれば理論的には温度がちょっと上がるということを否定している人はいない」「1945～1970年くらいまで温度がどんどん下がった。」などである。

5. 環境問題とグローバル化

グローバル化に伴い、環境問題について世界に発信するにふさわしい日本人の思惟方法についていくつか挙げると、海外の文化や理念を受け入れつつも、完全には同化せず「日本的なもの」は必ず残した点。六世紀、仏教伝来するも八百万の神を信仰する土着の宗教や山岳宗教という伝統的宗教と融合させている。たとえば高度な知恵として「本地垂迹説」がある。本地は「本来の姿」、垂迹は「仮の姿」として神様と仏さまを一体化させる。「実は神様と仏さまは同じもの」様々な神様は仏さまが姿を変えておられるとする。

「和魂洋才」つまり、技術などの表面的な部分は西欧の事物を受け入れたとしても、日本の価値観やものの考え方は維持するというやり方で異文化を吸収してきた。

日本の「近代化」は、先進的な技術を受け入れ、

時間をかけて日本流に改善し、本元より高度なものに仕上げていく。このしたたかさ、たくましさは、日本が持っている驚くべき能力である。

日本の強みとは、いったんは受け入れるという柔軟性であり、同化する過程で本質的なものとして共存する。けっして二項対立型の闘争はしない。外国の良いところは「すごい」と素直に受け入れて、しばらくすると日本流に焼き直して、さらに良いものを作っていく。

また、白色と黒色の混合色とする西欧の灰色に対し、日本には「利休ネズミ」という色彩に対する感性がある。「利休ネズミ」は同じ灰色でも、あらゆる色の混合色のため、各自、自らも含まれているという安堵感を与えてくれる。見事な多様性の実証である。

21世紀は、世界構造の多極化により、価値発信の時代を迎えている。独自のアイデンティティを持つこと。アジア諸国、ブラジル、ロシア、インドの非西欧諸国が自信回復しつつ発展している。

COP（締結国会議）が紛糾し、なかなか結論が出ない状況にある。日本古来の文化や歴史を知らなければ、自国に誇りを持つことも、外国の文化や歴史と比較して見識を深めることができない。歴史を眺めることにより、歴史的事実が、現代人の暮らしに多大な影響を与えていることが理解できるからである。日本らしさを残しつつ海外のいいものは取り入れながら、日本独自の道・価値・精神を作り上げる。日本が経験した公害問題から環境問題への拡大こそグローバル化そのものである。

グローバリゼーションを生き抜くとは、異文化とうまく共存することである。自分をよく知り、

相手のことにも配慮する心が大切である。異文化を吸収し日本の良さを付加して改善するという「日本化のプロセス」は、誇るべき素晴らしい特徴である。

6. おわりに

価値の転換は、自動的でも、客観的な現象でもない。

近代化のひずみとしての環境問題は元より、例示した国内問題も相当に根深いもので、創造的に価値の転換を計り、勇気ある厳しい決断によってのみ解決可能な問題である。日本国内、世界、ひいては人類の環境は日一日と悪化しており、近代的価値観の転換、すなわち、科学技術と精神文化のバランスが要求されている。科学技術からのひずみを解決するのは科学技術の価値観ではない。科学技術の進歩が人間を必ず幸福にする保証はもともとなく、単に未知の世界を開拓し、新しい可能性の発見の過程であった。それは幸福と繁栄の可能性と同時に、人類破滅と人間性の喪失への可能性の発見でもあるかもしれない。人間世界では、だれが見ても望ましいことであり、原理的に正し

いと思われることでも歴史的に容易には実現されていない。

ここに、人類の普遍的善を実現すべく深度ある哲学の登場が切望されており、それに基づいて価値の転換を計り、単に未来を予測するのではなく、未来を創造していく人間の勇気ある賢明な決断の実行が強く要求されている。グローバル化すればするほど、世界の国々のアイデンティティ、文化の多様性をお互いに認め合う価値観が必要になってくる。

日本には、寛容の「日本化のプロセス」、多様性の「利休ネズミ」などと、先進国としての独自の文明に根ざす伝統的な価値観がある。

今後のサステイナブル(持続可能)な世界をリードするに相応しい価値観とは、まさに、近代化から脱近代化への「価値の転換」に応える価値観であり、それは日本から自信をもって発信される価値観そのものである。

- ・ 木田元：『日本経済新聞』「明日への話題」
- ・ 丹羽宇一郎：『日本経済新聞』「識者コラム」
- ・ 梅原猛：『饗宴——随想と対話』講談社 1994
- ・ 安田喜憲：『稲作漁労文明』雄山閣 2009